

岡部定一郎「福岡城寸描」(12)

1. 福岡城の構え

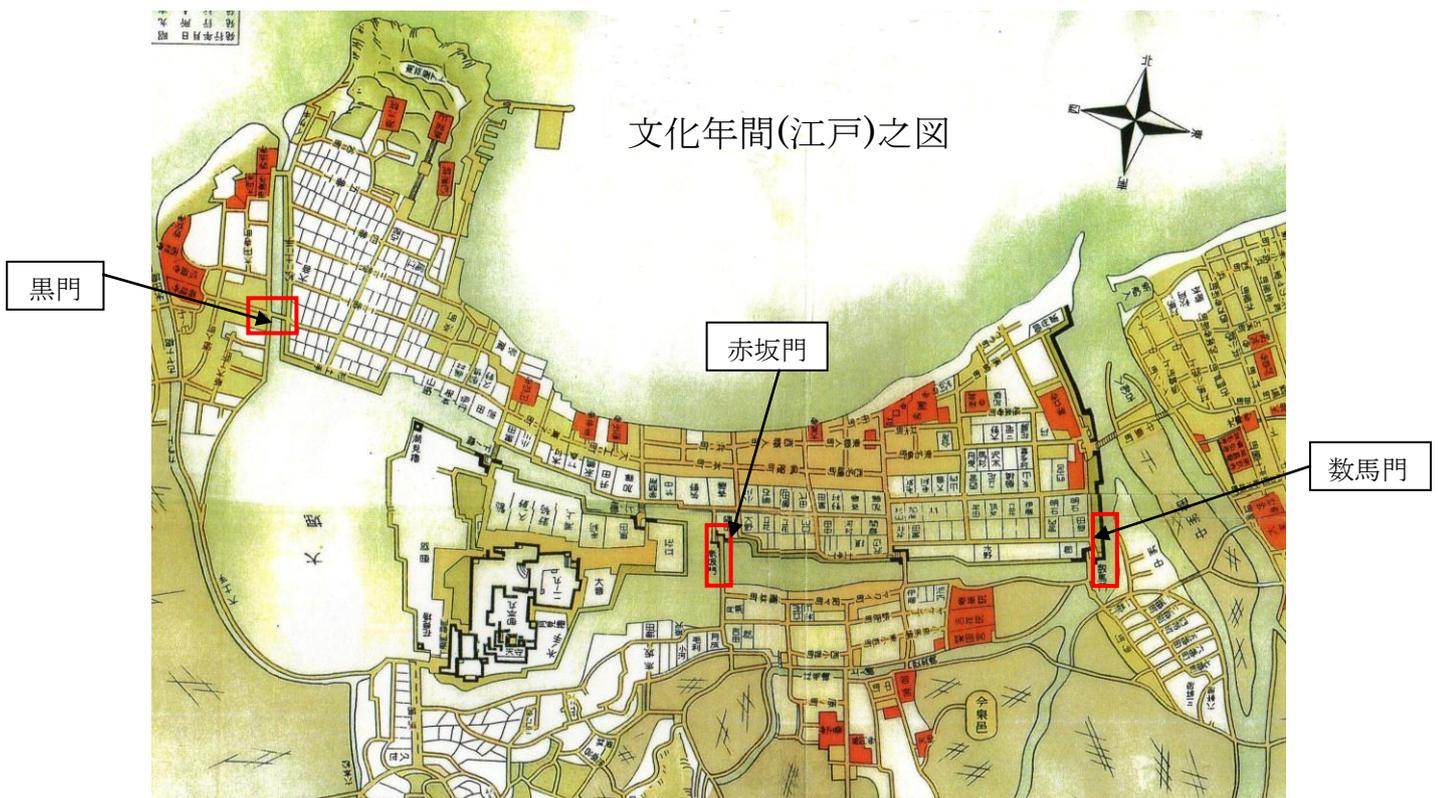
福岡城は三つの水門で守られている

慶長6年(1601)より、7年の歳月をかけて造った福岡本城を守る大きな仕掛けが「水」である。博多湾からの「満ち潮」を、現、中央区春吉の三光町橋あたりに設けられた「数馬門」(水門を含む)によって受水し、現在の国体道路とほぼ並行に、道路よりやや北側を西へ一直線に延びた「肥前堀」と云われる水堀によって、第二の水門「赤坂門」まで運んだ。

ここから水流を城郭に沿って南側と北側の二つに分け、かなりの幅がある堀に豊かに貯えた。現在、高等裁判所東堀の横筋にある変電所の塀に赤坂門櫓の跡地説明板(※)がある。

第三の水門は、福岡城西側に広がる、現大濠公園の西北に位置する旧唐津街道に架かる「黒門」である。大濠に貯えられた大量の水を、博多湾の引き潮に合わせて水門を開くと、荒戸堀を経て、伊崎浦から博多湾へ、福岡城周辺を囲んでいた水が自然の力をもって環流する。

このように広大な土木計画で造られた三つの水門が、現在もそのまま町名として残っている。



※ 赤坂門跡説明板



福岡城 赤坂門跡

当変電所用地では、工事着工前に福岡市教育委員会埋蔵文化財課により、遺跡の有無について試掘調査を用地の北東隅 15×17mの範囲を堀削して行った。

この結果、大正末に埋め立てられた福岡城の石垣が江戸時代のままの姿で現れた。

石垣は、地表下約 0.6m に現れ、発掘調査区内で南北長 12m、東西長 5m が確認され、北および東はそのまま調査区の外へと続いている。石垣の高さは 3m 強あるが石垣上部は明治、大正時代に破壊されており本来はもっと高い石垣であったものと考えられる。

石垣が造られたのは江戸時代初期と考えられるが、江戸時代末までに石垣の崩壊修復の浚渫などの工事が行われていたことが調査の結果明らかとなった。

堀の埋土からは、江戸時代の瓦や陶磁器、明治時代の生活雑貨のほか、古代～中世の輸入陶磁器等が出土した。このうち軒瓦には黒田家の家紋である三つ藤紋や黒餅紋などをあしらったものがある。また明治・大正時代の石垣上部を破壊して整地した後に、建物が造られており、これに備えつけられた便所(便壺 5つ)を検出した。